# 續の原

完

863
83

国立国会図書館　タイトル『続の原』 請求記号 863-83

ガラス使用

863-83

# 都の梁の京

立ちもどる[illegible]の向の[illegible]の根を[illegible]
[illegible]都の京の[illegible]
[illegible]の[illegible]草を[illegible]
[illegible]野のふるさと達都の何[illegible]判
[illegible]人[illegible]
[illegible]つ[illegible]の[illegible]辰の[illegible]
[illegible]月の桜[illegible]筆を[illegible]

一柳軒不卜

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

一番　芹

左　持　[illegible]田芹　拳白

右　[illegible]根芹　立高

[illegible]程[illegible]も根芹は[illegible]
[illegible]は[illegible]の[illegible]
彼亀さ[illegible]て泥中さ根を引　昔國君さ奉
ふんとさ[illegible]も[illegible]て楽人さ芹をとり芹
をとる左右無優劣

二番　白魚

左　持

[illegible]魚[illegible]　勇招

右

白魚[illegible]　招風

左　[illegible]造[illegible]て粉骨[illegible]
[illegible]
[illegible]白魚の幸[illegible]
さ仰可為持

三番　梅

左

[illegible]梅を[illegible]　松濤

右　勝

三日月を梅にたとへ　不角

暗香浮動月黄昏梅の精神性霊を和歌に表せり他にも多き作也

四番　立加木

左　持

そらゆくく良さり強ふ立加木　峻水

右

そらゆくく立加木に着て伸び　扇白

左孤村見る家色と右ふけゆく男心と共

あれば伸びと付て白つゆ　紙持

五番　蝶

左　勝

いつとなく花子にあるる蝶　渡石

右

松枝にお紙をかけ仙命日あり　麥歌

松枝のあてにしあるをかへ左のあてにいとなく　袁保

六番　燕

左　持

蔦かつら滝の水のむ草すれ　一掛

右

紅かつゝ中とてをもを手川　草ゝ紙　心水

輕業双方類かゝて云ゝ風流左右猪右ゝ

七番　蔦も

左　勝

ふゝ井戸也　蔦のさゝ敷水の隈　仙花

右

もこかゝ　ちゝ　ちゝ　蔦の　雨国

左　中七ゝよりゝ　ゝの縁ゝ唱ゝ　ゝ算ゝ

行ゝふ　ゝ　ゝ　ゝて自然の　ゝ　右ゝ

ゝ所を得ゝ　ゝ　ゝ芸水の隈ゝ　ゝて憎

八番　柳

左

夫ゝ　ゝ　ゝ　ゝ柳ゝ　野足

右　勝

鶯の　ゝ　ゝ柳ゝ　琴風

右番遠三日月の初つゝの句を上ゝ墨ゝ此句

半ゝ不ゝ左ゝ又ゝ　ゝ

左右ゝ

九番　雲雀

左　勝　[illegible]　魚兒

右　[illegible]　五位

[illegible]

十番　赤凡

左　持　[illegible]　危房

右　[illegible]　紅牡

十一番　赤の芽

左　持　[illegible]　朱絃

右　[illegible]　鴎白

右仁至言何未[illegible]左維解定[illegible]味

[illegible]不分明

十二番　猪　　其角

左　特

猪[illegible]孫[illegible]白い[illegible]

右　　不卜

[illegible]山猪

左右　[illegible]生田の[illegible]鳥も[illegible]と

[illegible]も[illegible]筆[illegible]墨の[illegible]

[illegible]号の友不卜子十俳[illegible]霧の句[illegible]独

[illegible]判も[illegible]牡句[illegible]他り



句猪[illegible]左臺右鱗[illegible]事[illegible]句

是[illegible]雅の[illegible]世[illegible]是非

も[illegible]人猪是非の内を出[illegible]

[illegible]号判の判も判

[illegible]丁卯の[illegible]

素堂書

一番　卯の毛

左　特

卯の毛や里の見えて朝朗　露佑



国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

右

黄なるの聲中絃を出す　不卜

左い玉鉾のふちゆく人も行のもの白妙ふる
行里を見かて足を止む一枝潇洒出蹊籬の
春色自然に深きを年経ぬる古ハ時節の
移所老声に叫くと清氏の女の琴心
をも弄て自保ちまを模陵のみち乱て

二番　麥

左　特

ひくまの牛游ぶてふ麥野氏　招月

右

麥野の麥に牛游ぶてふ麥野氏の蓑風ふる　調物

麥野の麥に牛游ぶてふ麥野氏の意味あり
奥の宮の左いまのふの神風と見る所ハ
意味ありて麥野氏の特

三番　筆

左　特

頭根ふり筆ふるく一庶の邪　全筆

右

ふふ井戸に分間を之下ハ且この邪　不諭

筆の物ふる毛ふ奥右一庶も見ふ所毛

又住まゝ〳〵古井戸の中より生出ふかゝ長
もありて年〳〵行るゝ亀共左の条性いつゝか
おとりゐるふ所を見て行ふ

四番　田植

左

蔦の葉ふ亀　押〳〵ふ田植式　立竹

右　勝

折〳〵詩歌くゝ面えん田植すれ　兼吉

張母子ら宝生の田植引連てうたゝ謡ひすること
思ひて謡〳〵　左も一作常かゝ歌有ま共右の
句の歌ちやゝ毛りん其を引直ふ

立番　百合

左　勝

喰ふす厩の内の早百合ん　一排

右

立月雨ふ三日まゝ百合のむ　破笠

左　るさゝ三行有息ゝ喰ふすゝ草行宮のこゝ
ねくゝゝゝゝ年の風情ゝ優ゝて艶ゝ右晴間ふ
ゝ穴ゝさん恨ゝゐふさゝ毛ゝ年ゝゐゝ左の百合
色原

古番　蕨尾

左　特

紫尾を旧おとせ　扇雪

右

蝶一つ見〳〵ぬ紫尾の茂うん　西国

古墳の紫尾に向ひて蝶一つ
見〳〵ぬもさそ〳〵いつまをつもと
かゝそさんぬ

七番　夕良

左　持

夕良や〳〵を落〳〵ふたの船　去来

右

昼良の中絶ふ草扇を　調義

夕良を名さかさ〳〵く苔あるふ
昼良を美〳〵化ある花あるとふ〳〵景
草扇をもやひうるけり　左右無

八番

左　勝　蛙蛇

一節ハ煙　を中ふ蛙老　立高

右

蛙まぬハ紫ふ子の蛙老　沖石

左の句煙さ中ふ一節の煙遠玄〳〵

しらべも品高し　右皆風情舟の路色珍しきは左
二葉色見へ侍れどもまさりぬる

九番

左　持

閼伽桶におとり水にほたるかな　　嘯水

右

かしましき滝の中にも蛍かな　　心水

暁毎のあか桶の路をしらしむ舎求るにや足
宗ふしといへどもかしましき滝の中の蛍が見え
かくれなるも又しらつゝくはするにやよる為持

十番

蓮

左

雷にあまりて破れしはちす哉　　勇招

右

はらまでもものめくらすに蓮哉　　野言

左の蓮は白雨毎の雷の響にも破れしや面
白かる右はやさしきの蓮の色中までもあるも
近くらきの出てゆくはるかにしくもさまの
形とかめぐる詞を求ずにしかして叶ためて
ひとさ點と定むべくなる

十一番

左　勝

涼

舩をもて除ける　不角

右

さかもりや板をすかすかすまし　琴風

左いとゝ面白き数奇なる舟にやとて徐日の碁ふ昌者を
忘れて碁をさしの中よりこれを見出て特
更やたのしく右い禅さつ者と性ちの程の姿
こゝ板をすかすかすまし　の五ゝ
能墨色ちもとも左の納涼ちいおりて
見ゝ侍る

十二番　清水

左　特

掃除して墨ふく人の清ゝ哉　風ゝ

右

ふゝ越ゝ又多ゝ南る清ゝ哉　嵐ゝ

左いとゝ必ゝ所ゝ色ゝ作ゝ句ゝ面ゝ白ゝ
ゝ人の為ゝ中ゝ清ゝ水鳥跡を留ゝ
ゝ岳ゝ竜ゝ立ゝ右い立ゝ戻ゝ云
ゝ清ゝの姿ゝ中ゝ
限ゝ能時ゝ書ゝ

一番　ゝ秋

左　勝

調和

文月や陰を感ずる蜻蛉の内　其角

右

安き戸のこゝろうちなぬ縄すだれ　嵐雪

左ハ琪樹西風枕簟草秋といふし秋思の情を自後て新涼至る國中行婦人の竜おとろへ家ふんにも色感る字もれしかられ右ハ眼にハさすやかに見え添ともいひ其心思ひやりて心動かぬ縄すだれ寂寥たるありさま凄て切なるとしてる肌骨に通りて耳心すゝむと此番秋の巻頭とするは左に勝を付る事となりぬ

二番　露

左

末掃(ハけミ)に荷ひてなきふし行の露　古川

右　勝

あさ露ぞ待つ洗ふる野一ゝ氏　兼言

両句共に露を詠る中にも句体もききてしかかの右の野ゝる全体読譜にして一句千里の怨有作者を作左ハ判者の心かしまさにありて寛くなしとや

三番　稲妻

左　勝

稲妻のかゝくゝしぬらぬ鬼一の掛　大笑

右

稲書ものかくもぬ僧の金舎すか　不角

左　稲書のかゝのまゝ実さ数多くて歌の体ゝひれ
臭はるゝ事なれ　この巻さ発と思ふ作
者のさ新の心さ多くあり　右も彼亦の
さ　かゝもさ所なぬ所多つ　右も彼亦の
上さ牛枝海さ京もさ四ふ　こさ　任
居男ひ始ゝ多さ僧の居りさ稲書のさ　あ
世の常のさ多ゝ見さ多ゝ　左ふ多

四番　鶯

左　苔間也　風ふ苔ふ苔ふ苔の色　蚊足

右　勝

代多さ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　扇雲

左　経信卿の門田の稲葉おとゝ　ゝ　ゝ
ふる雨のさ　此作者の傳さ　ゝ　ゝ
行ゝ　右の稲葉の葉の　ゝ　ゝ
ふやふふ三体の　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

五番　鶉

左　勝

甲斐なき　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　琴風

右

聲　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　草京　佐荷

左は鶯の声の聞なされ侍りしかの野辺の秋
[illegible]
見えるかの侍り左こそ侍りをうなり侍り

六番　弱道

左

照月の面色こそ侍り

右　勝　弱道　調柳

まことに清みあるに中ふる弱道　立高

左の歌の上の句の二句は能よりもいとあはれなる
弱道の歌は句の二句弱道ふるまひもいとのどか
くゝとゝ中ふるに右は志ゝ[illegible]



左はかの[illegible]侍りし

七番　薄

左　持

[illegible]　松濤

右

[illegible]　仙化

左右共に[illegible]持

八番　[illegible]

左　持



国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

[illegible]

右　拳白

[illegible]

右　泥石

[illegible]

九番　菓

左　持

菓の[illegible]菓の[illegible]菓の[illegible]草の[illegible]　文鱗

右

[illegible]野菓[illegible]　石[illegible]

[illegible]

十番　菌

左　勝

[illegible]菌の[illegible]　勇招

右

[illegible]　[illegible]国

左[illegible]菌の[illegible]



国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

右八芽将山差山奈の芽うゝ如も仍左を勝とし

十一番　秋寂

左　持

秋ハ只うゝ何すゝ海の日暮すゝ　一排

右

秋有里哉誰年寄を写池の亀　不卜

秋ハ長天と共に一色と三尺の童子ハ蒸暑重
をふるひ〳〵も日ハ暮ぬとゝ思ひ〳〵ハ
又池の亀の方ハ暮の後迄も不易の孔倚ハ
色も目出度作ハ云ともすゝもしるもとゝ特とゝ
筆をとゝ仕りし

此許ハ十番迄ゝ十二番ハ古本無之

洛陽　湖春書

一番　落葉

左　持

落葉ハ何すゝ木の葉ふゝ散すゝ　風すゝ

右

落葉ふゝとゝ不二の時ゝ場　一川　松濤

左の句景気微細にして左又
山もあるべきれふにこの詠一句の安もなるか
にて有べく作ふべき也芸句中眼を見えるふ
切字風一立ちまりて云詞一切もえ切字加
べきべきにて有べ作ふ所あるべきを難して特に定
作べきれ

二番　霜

左　勝

親しきの霜枯もかうふ野べ　作五

右

霜原一あふぎをかざす枝の船　勇招

この霜ぞあるべきもの歟すべきも云ふべきや歟の

子を思ふと詠句一此引き作して野辺の子
を思ふべきふ母やつこ右の句ともあるべ左
句秀逸なる也中にも作べ

三番　夜具

左　持

あの松立て月枝かすべき枝夜具　工高

右

巡る程得矢巡る矢もれ一　文鯨

左の句茂き作べ作の作人の取宿ふべ
なり右の句安けべく句なべべに有べ芸
に得矢べべかべ一作次持べ

四番　桔梗

左　勝　板苗色桔梗ヲ見ヽ川あてゝ　松聖

右　石橋色かも野さ淀さ入日すれ　空峯

左の句末桔の吹そゝ〳〵て苗板のうゝと動る
月のおとゝの目ゝ〳〵川面さ
姿さゝ〳〵て一句の文言ヲ　右も文桔梗の風
景見捨すゝく作也

五番　細代

左　持

子を連こゝ板の細代ヲ裏挾〳〵　石ゝ

右

細代本の中ゝふき止〳〵ゝふ水ヲ南　不南

細代の床ヲ子を連〳〵ゝふ作意路〳〵こゝ
ゝ〳〵右ゝ細代の板の水ヲ宮て寄こゝ弥猶
ゝふゝ色左右然ゝふかゝ〳〵

六番　石蕊

左　勝

破色ゝふの石蕊ゝ点虫ヲ籠ヲ　調柳

右

石蕗さくや雁ら曳行く　雪車の跡　立笠

左の句ゆくすゑの方を見おくる家
ともしびもまの薄も思出て　をてをらく行る
かゝ曳行く雪車の句意出ると不写作取
左為勝

七番　鴨

左　勝

鴨の聲ふり渡る月さゆ　嵐雪

右

鴨さゆて葉を干物に塩なれ　魚兒

すゝ鴨の声ふり渡る秀句限れ一句なり

かゝてさ霜空の素色ふるゆる波脇ふりの歌
を吹すさまえ三月廿四日の日毛ふるとゝるうんさ
ゆるゆる鴨右の句を蚕飼こゝの清さゆるゆめ
ゝ三ゝ鴨すゝ鴨を出すゝ鴨の声　句調高
出ゝゆるん

八番　永往

左

陸平ゆて行ゝ品母さが家秋うれ　一排

右　勝

門屋ゝ家屋居をゝえる家永往式　琴風

永往平さの家秋石のうれ家色ゝゝかゝ

ひとり[illegible]右は狩煙[illegible]の[illegible]の[illegible]永柱[illegible]門を[illegible]居の扉感情
[illegible]

九番　霰

左　持　李下

あるつきの何[illegible]毛[illegible]の伝[illegible]

右　伸風

[illegible]野[illegible]恥迄[illegible]

[illegible]寒威暁の霜覚[illegible]の誠[illegible]
[illegible]世[illegible]何[illegible]迄降[illegible]と[illegible]声霰[illegible]
右は又[illegible]の[illegible]

耳所見[illegible]師曠の耳[illegible]離婁の
眼の[illegible]云共左右の是非辨[illegible]
事[illegible]

十番　神楽

左　勝　去来

[illegible]神楽[illegible]清士[illegible]

右　孤屋

鈴[illegible]神楽[illegible]

左の句[illegible]難も[illegible]
右は[illegible]呼神楽[illegible]
[illegible]右[illegible]難[illegible]左方勝[illegible]

十一番　頭巾

左　勝

山里や頭巾とるかの人もなし　京　觀水

右

頭巾きぬ出家見てゐる野中哉　嵐吉

眼てふまぬ山中の客ゝ　御林ゝ行ゝ右ハ眼てふ物ゝ　法師人ゝハ勿思ゝ

左　悟了

十二番　十掃

左

何方へ行ゝ掃ゝ　拳白

右　勝

ゝ掃の日の拵ふ変を作ゝ　仏ゝ　不卜

右ハ掃の十ゝ掃も思ひ　両句滑稽の誠をゝ　色ゝも目出度仏ゝ　拵ゝ

一柳軒不卜ぬ一ハ身を塵境に陋ひ　雲井の山の山ゝ根を　芳野の芝に笠を　ゝのひ湖水の月に琵琶を　かゝる事ゝ年ゝ　是ゝ　ゝ集ゝ　ゝ再　ゝ及ゝ　ゝ春　秋ゝ　ゝく雲ゝ雨ゝ

東離の菜も名をとゞめ唐朝の牡丹も
高麗を笑ひ梅の俤さくらの奥も折ふし
時ならぬを句も亦人を驚ろかす性を出す
き枝に入るの花の香のとゝめ色こゝ本の葉
を拾ひとる左右にあの名を積て四節とゝ
判士らゝかに其一にして仮こゝ楽ふ
ゝ笛を益もに似るりとゝん事也
青鷺の目をめいあふむの口をとゝん事なゝ
貞享卯年筆を江上の閑に濯ぎ終て
蕉庵雪夜のゝ灯に對す

## 祝賀書

入相の鐘を見すふ柳ゝ

嗣和

藪の一重に蕎子匂ふ家　不卜

陽炎の市に蹴跋の音　拳白

ふゝを小唄に母をかゝも　不角

三日月の九くるまて草ゝ　渓石

雪薄き松ハ土を舟の史　勇招

足ゝ砧ゝ寺あそきこ　卜

笠に薤の実を殺ス　和

大内のすゝ掃役の巳の刻　角
森もヤあ葉を痛くたゝめてふ　白
面の月を淀の小湯女とゝ[illegible]　招
ゝ以陰えてゝ火俗の屑　石
中陰も程ある芽のわゝ色草　和
あゝ面の牧居て乳ふふ兒　卜
一度ハ出もひ信ん七面　白
今年ゝゝりハ吉京の俗　角
ツつの芽ツつの月ゝゝ盟ゝて　石

蘇見ゝゝゝてハ醒ぬ衣の香　招
巳ゝゝし書油ゝめてゝゝの猶ゝゝ　卜
日出度さあゝふ殿の伊人　和
篠保く宮居桜皮て菖ゝえて　角
ゝを半て二藍の庵　白
槌ゝてゝゝ森ゝゝ氷室守　招
陽ゝ之巳五丁余の道　石
あゝ白を根ゝゝ送ふ賜ゝさ　和
若元喪を抜て雪ゝあて日雪る日　角

晨明ハ入色ゝの鐘ゝ恨ふ一　白
あゝ一の月ゝ須ゝ入こゝやぬゝ　卜
黒鶏の古巣出ゝ出ゝ後ゝ　石
巾一程ゝ行ゝて　特　招
死ゝきゝぬ僧の巡りの淋中ゝ　角
陣陽の笹外ふ野辺の笹原　知
立ゝゝ羽を集ゝゝふ雉の声　卜
油ハゝゝゝ僧ゝ巡ゝふ一　白
苔人ゝ苗賣ゝゝ今一の山　招

雪のゝふむ京の草鞋　石
。
桜ゝ鈎鐘のとふ尾上うゝ　支磨
春日ハ草ゝ萠ふ野の平　峯白
鶉実の籾の雫ゝ新めまて　不卜
岩のゝ多ゝゝ見ゆふ鶏の巣　渡石
月のゝふ秋の浪のこゝと　松濤
暮風の清のふゝゝの虚家　丸
古欲のゝを思ひ城ゝゝと秋の旅　白

雲を見居る狐入の言　卜
狐ものや甲斐の長吏の契〳〵て　石
ちゝきの元あふ草の外うゑ　湧
艾葉（アヲ）麺（ナシ）も比も〳〵かゝふ裏（ウチ）山て　九
奥のゝきほゝの河ふゆ〳〵セ　白
かゝるりハ斐あふ僧の苔〳〵て　卜
鹿（メシカ）鹿（オシカ）の常て来ふ菴　石
鍋物のゝゝ色落ふ雪の跡　湧
昧死〳〵てゝり美夏野月九

苦るゝ泥ゝゝ哭の森ゝゝて　白
暮ゝりあふ辻の裏　湧
夕ゝゝ夫刻の物の鍋ゝゝ　九
下戸の酒ゝい家ゝゝ　卜
聳二人獨て遠ふ畑七畝　石
山路ゝるかて幻臺の入り　白
歌ゝゝ今宵も鍋ゝ秋の家　卜
思ふゝゝもあゝ良の糞戸　石
蟬て年殘ゝ妻の裝　湧

因嶽あく日ハ盃の黄昏　九

と食とも世ハこのくぬ月の影　白

芝見すくれ〳〵下京の紀　卜

おれ〳〵野ゝ菫土筆と並居ゝ　石

蝶ゝ土〳〵とかもハ未の子　湖

志の垣もあのうさと為ふ原氏亀者　九

樹をぬすく櫂ゝ形〳〵し　白

真間寺ゝまゝふの破をを繕を　卜

粧女のゑめゝ玉形ぬ世ゝ　石

青秋もおれ〳〵但の秀の色　湖

鏡ハ老を土〳〵ぬ赤ゝ土　筆

。　蚕山

為の青色〳〵ゝ穿柳ゝれ　不角

ゝふゝゝふゝゝてゝハ正月の空　一桃

青苔の情ゝてゝふ野を志めて　以喉

清ゑゝ蝶のゑゝ陸くれり　扇雪

晨明のゝふ程暑を細代笠　琴風

きく見おゝゝ京の節末

忘れそふ泪の雪のきえてこそ　木ト
名をあらそふ住傾城の菴　山
折もてあふ蕚をぬきし　角
不殘をもとめ来る黒髪　桃
元人を遣戸に送ふ秋の暮　喉
月ごとのうく常の米賣　雪
そ[illegible]ぬく[illegible]帳の外に是もまて　風
[illegible]年もちらしゆ雷のとゝろき　卜
京岩の水掉にさゝふる菖蒲　桃

奉加にすふ能優ら[illegible]　喉
三ゝを追法師ゝふる子の別　角
奈所ゝり音のゝ[illegible]餓鳩　山
清め程足跡の嵯峨の雪　雪
角を義して見遣ふ庵　風
優婆塞をゝ年も奈羊けり　卜
[illegible]ぬく生て土を壁家　桃
半月を賞ふゝいゝふ都人　喉
安ふゝ暮ゝ豊の世間　角

馬の足　山
きのふもかぶる笠の袁く　卜
いなせをまつすぐなる　風
屋うち清しき主の行ひ　雪
負ひさの泊かくこそ　梶
佛を濡す　盃の白酒　山
人初の花の色かをる　角
入日の鐘ちかつきかつき　風
ちり遠ふ子を去るとて　雪

僧のいとふ兒の形　喉
茶見をとる程の雪　卜
都史の京の青柳の菴　筆

○　其角

明星や桜さくめる山うつり
詠　ちのり　月の陽炎　陸水
立雉の跡に入る夫の縄舞　琴風
おのろ嵯の赤尾をとる　扇雪
水ぬるく厠の下を行流れ　不卜

涼しさ天に満て志ぐれ雨あめ　一排

旅衣集て おくるゝ秋ぞ　水

信濃あて 素堂の友　角

盃の妻 遠ゆ見あるし　雪

田植を主ふ ゝゝの 嬉　風

呆吉る 影ふ かる 籠て 催し　排

人の 紙て 乙 お 行て 番　卜

水雲の 僧を 呼ふ 俗ひ ろ く　角

いとあを 見ぬを 男 市の 麻　水

紫の糟 ぬ 軒の月 ぞ ゝ 文　風

風 ゝ ゝ ふ 墻の 古 瓢　雪

花 ゝ 文 め 盲 醤の 才 を 俺 す　卜

ゝ ふの 朝 ふを 舎利 唱 ち ふ　排

山 城の 小 便 賞 も ぬ ゝ の 之　水

雪 見て 歩 ゝ く 紋の 傘　角

ゝ て ゝ ふ ゝ 冬 ゝ 草を 尋 ね　雪

菴 を ち ふの 茶の 陽 ち ゝ か す　風

お ー 時の 卵 わ ふ 音 ち つ ゝ て　排

年年紫ゆふまつの明不の　卜

商人の夷の宮年祝せん　角

夫婦の上戸祝ふまるるまい　水

狂言年作ふまるるい狛まを　風

いとひもまをる陸草の寮　雪

月見ふ責る見んとまふみん　卜

春年鄰の後菜のらいらい　林

花年祐年楠葉夷野のあさ保ひ　角

けふふ高萬の加とひ年月　水

菊菜のふる結鳥の四高あを　風

屋形えまと國府の陸諸代　雪

真人のからの音花の外　嶽

寓ふふふ水の高各所　卜

追加

赤狛芦ゆけふ桜ふ狛不卜

羽年白ひ高ふ椿の鳥り　琴風

白鳴るの海ふ長家角ふを仙を　真角

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

酒をすゝめ物あの三階　卜
明ハ又師走の月のおゝさの　風
雨吟しつゝ弱をゆくゝ　角
うゝ廣くゝ高ゝ越ふゝ　卜
雪隠とゝ　枕　芋の　軒　風
銘をきくふ梅の鉦鼓の音ふりて　角
蜜の奉加帳　松魚ふゝ　卜
時をゝの祭の音舞妓ふ作　風
あるゝ鏡に顔をゝ　角

加ゝ紙をゝ但の数に　卜
忘ゝの窓に梓をゝふ　風
拾をゝぬ柱子の親の恐ふん　角
かをゝ蔭ふゝの墨の麦　卜
月花の境をふふ歌の名事　風
著の秋保安寺合の僧　角
衰ふふ鞠の女の魚をゝひ　卜
蝿に帰屋住ふ思ひ寂しさ　風
夕立を恥ゝ雨あゝ吉　角

陸奥の早歌神しいまるる　卜

佐鯉の庵にやらと望むん　風

大根あきまふ細の見後に　角

雪の舟　卜

足袋はいに俺ふ笑ふる妻　風

色ふ数聖に紅をかせり　角

毛の男ふ日い猫のまふ　卜

世の月を羨ま飽と風まま　風

佐しまふ京祇と猪ふ移風　角

中ふ恋ふ後を加く児の恋ふ迷　卜

外牡の中ふ北の透姐　風

男欲籠に忘保しを傾ふ　角

既に三つ角川宵の盃　卜

佐ふ多佐ふの御影の影哀　風

西　上注　のふ雲　巧吹　角

## 都々逸の原

### 春

物くもの附るもしらぬ霞　不外

松とまつ雪の旭と染ふり　不角

吉沢の芹ハ巧もの白ひの原　工高

笑ふ子ハ歩ぬ芝ハ踏ぬ郷　景道

出るやうな野も出ぬ若葉　文子

花ハ咲て黄なる中上野哉　調柳

日のくもるとなつかしの霞　松濤

散るのいとをしの花見る椿哉　佑蓬

弱腰とさとる見るもの雪間哉　峯白

### 春衛

竹の香や柳を寿ぎ蔵の戸　青角

おくれ出て柳ゆつくり柳哉　支丸

春柳の雲ハ星の歩くうち　一芋

風ふくとなくとき岸の柳哉　勇招

角田川哉

夕去々一風毛吳々ふ柳式　不卜
青柳中行沓中ふ毛る上ふん　調義
削ふ〻夢の如ふす軒端式　立望
象家の奥中ふ見ふ蕊式　比竹
四の夢を知ふ〻雅め蕊の邦　溪石
玉詩の袂ふふふ夢一の邦　調柳
為の日中移ふ毛あふ毛蕊　扇雪
為為見のふ為毛ふ蕊ふん　重元
下ふふ〻毛ふ毛ふ〻せん為のふ　峯石



為ふ程のふ〻の数ふふ隱（ソムシ）の邦　一挑
多数ふ距角かめふふ為ふ式　不角
刃詩の是ふ中ふ〻ふ為ふ式　不卜
小紙ふふ為ふ毛雅子の姿式　由之
呼ふ〻ふふ何毛ふ夏ん友ふふ　一挑
栗の愧見ふふふふ青の為　琴風
遊毛ふふ昔ふ中ふふ雅ふ邦　蚊足
夢の巣ふ見ふふ〻ふ堂式　不角
是麹の自ふ毛蕎の風見式　味為

山吹や秋の雪こそ少けれ　文鳥

京の花の美さこそ千さ程ありけ　宇高

垣の根張る京の盛の春　蚕山

雛の宴後ろ髪引く京の春　其角

根の日や女供の供をして　琴風

春ち搗こそ二日を雛の宴　湘柳

記京賣ハ懐愛恋の式　立圭

段子と弟子と元禄金ふる毒崔　不角

降つるの市かつを京の仕業式　李下

そこ〻この京子雲の歌羽織　三園

花子拾ふ蛍ちくひ友さめ　芭蕉

月後雲影上探子　不卜

月影のひと槌ゆふ桜の形　文鳥

影ちく〻続子おこる遠雲桜　蚕山

山さく〻住む佛ふ京ち式　涼石

蛙の鳴子ハ京〻ふ桜の形　一晴

そ〻桜（ホノカ）風子雲色の傍ちれ

見るゝ也物淋さ是一山猫　琴風
さくも敷毛一本はゝそゝ山さくら　挙白
立寄る寺の名をきく猫ゑん　調物
常ゆゝ朝見る寺の猫ゑん　蘇吾
寄ゝ八ゝの影ふさゝ守　梅雀
行隠もなるゝ雪ある猫ゑん　湖舟
憂ゝを花ゝ生ふゝ家たゝめ　調味
弥呂の俺ゝ峯のゝひゝゑん　由之
ふゝ敷ゝ弥喜のゝいゝ　湖舟

也ゝゝ焼ゝゝ屋ゝ　三星
菴ゝ猫ゝ峯ゝ物ゝ白ゝ　流石

蛍

三月廿日當三十日
陽光別袁苦吟身

大酒ゝ起ゝゝの憂ゝ　稜角
根八ゝ芦葉ゝり山を　挙白
袁亭を東ゝ
彩良の二葉ゝゝ巻ゝ　四柳

浮草　孤子　蔭　不知火　三谷翁
卯月　雛の宮　の花　曇　活蓬
顔花　菖蒲　中秋の月　立雲
稲穂　草　さそく　女の早苗　湖味
返る　行春　中ふく　ちる　相義
子を負て　帰る　田植　源五
逃　高の中　蟬　五月雨　和多
見る　人を　傾　早百合　朱絃
中ふく　夏の雨　蛍　蚊帳　戈麿
草の根　蛍の　小雨　雨国　湖舟
花蘭　蝉　雀　一郎　不角
蝉の巣　青葉　小雨　梅雀
雪ふる　人　蛍　雨国
梅雨　二尺　雨　蟬の色　蚕山
寄る　松　蝉の声　琴風
思ふ　一声　麦の中
松陰　一つ　蟬ふる　目を
寺　鐘　土を　ふる　二つの　動く


国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

吉原ハ秋千ちやぬ涼しうて
扇しをる鐘の尺見るふまくまくし　由之
帳口ヲ能ハ見ぬ涼しさ　伸風
夕涼し鞠をうちあるふ小兵　嘉吉
分を出く夜ふくるあ涼しうて　峨舟
百ハの声ヲ繁くまかふ　扇雪
涼しさハ子孫迄小兵うれ　文子
日ハ月迄しをふ清水ふ　不卜
此の夜ハ日影を走ふ松島賣　松濤
　　不詩



此ひとふ秋しを連ふ川ふ涼ハ賣　嘉吉
昼鳥ヲ朱鳩涼を衣ふり　芭蕉
仇一口外ヲ欲ふを子供うれ　不詩
　冷ふふ仇の水ヲ河ふふ
強ハ羅の袁を去ふあ真葉うれ　不角
常夏を見を羽織の暑ハ　三園
冷ヲ夏の真昼の加茂の色　工房
夕立ふ尾上の寺ハ給ふ鐘ヲ　琴風
夕立ヲ蓑面の滝を傳を見　涼石

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

夕立ヲ川ヘぬるの賞ふ舎ある　不卜

秋

六日の秋競べしゐ　女七夕　不角

七夕を法師の息子男ぶり　扇雪

傘工の日和を星の手向ある　沖石

富士ヲ幸ー幸ー星の別れ　琴風

筏上りそゝかを為ゝ相撲ある　不卜

ゝゝ衣の袖ヲ絡しゐ　角力灰　其角

何と息ゆ おしの君ヲ見しゝ　戈磨

弱鳥の蔓ヲ手ヲゝ　古川

帆柱ヲ槿這ふ今後ヲ　俳柳

槿の白い茶を奢る陳ある　立坐

何と白ヲ小只の栗もゝ　梅雀

槿ゆゝ蛇嫁しゝ後後ふし　俳義

ヲ落を夕八枝複ヲ　李湾

ふゝ月の晩日おと行く　比竹

品川を般ゝゝ乱し　稲の花　硯子

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

四〇程なく日向遊行秋の魂　琴風
松虫の声ちかくなる恠哉　夕口
草の戸の蚊帳を敲つく惶なり　不卜
草庵の蓑ぬぎかけて雨うれし　伸風
立ぬ傾ぶく情哉　孫ろ郎　鶏白
霧ふる〻と柏子ぬる夜哉　扇雪

雨の降ぬまを

告ふの月夕見て墨くゝ哉　不角
鶯計雨の月見る鳴哉　立笠

蕎麦の一ぱい　一雄
栗ハ名のいやし一文菓の九哉　不卜
思ふ事も菜の白い花ふ厠すゝ　文口
楷の実ふ生ふ毛ふ養ふ多ふ綿ふ（子とり）　蛍山
ふるれふ〻ふ毛ぬ雅中九折　三翁
張イ言一ふ系聖の中の名地蓑　文子
ふ〻ふ蓑の松ふ〻ふおふぬ子種哉　峯白
痩年年紫身を秋のすゝ哉　調柳
ふるふ〻ふ表年毛ふ一秋の不二　不角

冬

暁の星を迎ひ行き雲うゐ　勇招

女ゝてをゝゝぬ門の時雨の音　文子

葡枯て壁をめりゐ菴うゐ　琴風

見こゝ見て落葉を悔む情うゐ　活蓬

落葉して世に隙逸の菴もゝ　調味

わの長ゝ年ゝゝ物ゝ文ゝ遠郷　不角

閑のさゝゝ月のさかりうゐ　柳甫

雨落て精の声寒き夢ゝ　立哲

那ハ三里霧ゝり出ふ龍ゝ　白楊

霜の結夜奥の大の叫うゐ　工高

杜鵑を訪ひりふ雲ゝ

霧る一竹見ゆゝ月ゝ　芭蕉

海中に霧ゝ色を匂ふ秋の夕　戈九

竹の冬ふの雲ゝ　ナナカ風　活石

川越ハ雪の尾を引く氷柱うゐ　琴風

暮ゝふ日ハ氷柱を〇ふ寒うゐ　活石

帆柱の氷柱見るや旭哉　仙角

雪を踏て後の雪のあしたかな　芭蕉

雪やしづかに降あるゆふぐれ　其角

草の戸や傘さすやうな雪の暮　拳白

垣越に見る雪川法師哉　嵐雪

漂木やゆふべ早き千鳥哉　一桃

芭蕉庵にて

菓拾ふ蟬むく蜜の情哉　不卜

掃木や鶏雑色の音　立圃

香のかくて梅に負ぬや炭火　和水

蛛ふるふる海ふる火燵哉　洒山

年ゝ梅さく園にかくれ　梅雀

行年八枝に折くる蛛ー　竹山

わら貧を蓑毛あり年の暮　扇雪

坐右銘

行年や壁に貼ふる書　其角



国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

貞享二丁卯年梓行
文政二己卯年九月再梓

江戸　橋梁　雄嶺
　　晦室　乗岑
　　嵐高　柳々
　　栄沢



[illegible]の原は貞享二年丁卯の春
の撰集にして[illegible]風雅の祭
[illegible]を[illegible]龍の巻り板[illegible]
今の標題[illegible]
[illegible]
[illegible]
の巻撰[illegible]一集あり[illegible]
[illegible]不卜[illegible]の撰[illegible]

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

京まうする昔を見てふたの時を稱し
いとめてふるこゝろ板にの月を世とふ
齋宮を示志のたまふこゝはうるら
いとまの時を浮ちこゝ社萬あまをたし
文政二卯のこゝ手搖榮確嶺けいこゝ羽ふ
節を曳の幸をこゝうこゝ社岩こゝ此集を
嶺こゝ傳こゝ嶺浮こゝ曰復玉を淚の蒸物
ゝかこゝに似こゝ也こゝ身こゝ奥の岩有
聲こゝ浮こゝ写取こゝ搖こゝりこゝ海こゝ



時道の蓋也ゝこゝ所を端こゝ
おこゝ仰こゝ知こゝ人百岩こゝ石こゝ生し
こゝ百岩の往昔こゝ岩こゝ今こゝ
飛岑柳こゝ深こゝ行こゝ社確嶺こゝ道を
志こゝ比こゝ卜曳の意を讀こゝ係こゝ
切こゝの京こゝを凝こゝ嶺こゝ新こゝ集の
再生の大道こゝん岩こゝ大こゝ
叶こゝを平こゝ業こゝ行こゝ也こゝより
あこゝかこゝの古堀こゝ影こゝ生こゝ其業の

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

863
83

14119

鱸く何ぞ孫と暗稲舟の
いとかなく言出川の原松川の流
くゆるとも明日の見た曉も来る和紙
亳を加へて濃くする

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『続の原』　請求記号 863-83

ガラス使用